

特集序文 「ポール・ド・マンを読むこと／書くこと」

大田信良

読むことは、書くこととの関係性において、どのようにとらえることができるだろうか。こうした問題の本格的な議論の前に、まずは手始めに、読むこととは、書くことを理解することだと仮にしてみよう。この場合、理解することとは、テキストの指示的様態を確定することであり、当該言語の語彙的・文法的なコードを操作する能力があれば指示的な言説は理解可能だと思ってしまう。文彩や比喩に直面しても、字義的な意味と比喩的な意味の区別ができさえすれば、文法その他の統語論的要素ならびに意味論的・論理的要素そしてコンテキストの分析の力も借りて、書かれたものの指示作用を決定的な意味に還元することは、すなわち、読むことは、可能である。こんなふうに考えてしまうのが一般的かもしれない。だがはたしてそうか。批評理論を少しでも学んだものならばもはやそのように考えてすまずものはいないであろう。

たとえば、『読むことのアレゴリー』のある箇所で、ポール・ド・マンは、次のように述べていた。読むことなくして、書くことはありえない。だが、読むことは、自らの読解が可能であるのだと措定してしまうがために、ことごとく誤謬のうちに置かれている。言い換えれば、書かれたものは読むことができるし、すべての読みは論理的な検証を受け入れる余地があるのではあるのだが、その検証の必要性を確立する論理は、それ自体がもしも検証不可能であってみれば、その真実を主張する根拠を失ってしまっている。字義的な意味と比喩的な意味とは、いつもたやすく確実に区別できるものではない、つまり、指示的な様態を確定することが主題的構造においては可能であったとしても、修辭的構造を含むテキストの全体構造においては、テキストの意味はいつでも決定不可能であることを明らかにすることはできるのであり、読むことイコール書くことを理解すること、というきわめて単純明解な関係は成り立つわけではないそのようにとらえるだけでは不十分ということになる。ここまでの話は、すでに十分知られていることでありいまさら復習することもなかったかもしれないが、議論を少し脱線してひとこと言及だけしておこう——ド・マンの批評理論においては、言語あるいは言語を用いた世界・存在の知に關して、つま

り、いわゆるリテラシーやそうした能力・資質を育成する教育に関して、文法や論理学だけでなく、修辭学が、実のところ、中世ヨーロッパ以来、重要な意味・機能を担い続けている、ということが示唆されていたりするのだろうか。

少し別のかたちで言い換えるならば、言語における指示的意味というものの拘束からわれわれ読者が無造作に身を引き離すことができるというのはたしかにばかげた考え方である一方で、こうした指示的言語のステイタスは、テキストの比喩的および修辭的な作用・機能によっていつもすでに突き崩されている。読むことの優位性は、すなわち、読むことがその前に存在する書くことから自然に帰結するものだと思います。読むことの優位性は、逆転せらる。われわれの生活を支配している無数の書かれたもの・エクリチュールが理解可能とされるのはそれらの指示的な正当性についてあらかじめ意がなされているからであるが、こうした同意は、たんに契約的なものでけて本質的・構成的なものではないので、それはいつでも破ることができる、と同時に、書かれたものはどれであれその修辭的様態について問うことができる。このような意味で、ド・マンによれば、書くことは、読むことの不可能性の言語的な相関物とみなすことができる、ということになる。

読むこと／書くことをめぐる問題機制がどのように一筋縄ではいかず理解したり判断したりすることが困難であるのは、ひとことといえば、書かれたもののいわゆる作者や読者、指示対象、そしてまた、語り手・キャラクターやさまざまに主題化される言説領域・イメージといった、諸カテゴリーや諸コードが、言語あるいはテキストの全体構造の効果として産出されたものであるから、ということになるか。そもそも、テキストとそれによって指示されるもの自体との関係も、これらふたつの間に両者を媒介するもうひとつ別のテキストの存在なしには、すなわち、このような意味でとらえられた間テキスト性なしには、考えられないものであり成立もしないものであった。

書くこととは、読むことに実は先立って間テキスト的關係にある歴史的またはイデオロギー的サブテキストを、その「テキスト性」・歴史性とともに、いわば事後的に(再)構築するあるいは書き換えることにほかならないのであり、このような強力な解釈の行為すなわち書くことによってこそ、読むことは遂行される、というふうにとらえることができるかもしれない。いまさら念を押すこともないと思うが、サブテキストは、それ自体として直接的に現前することはなく、いつもすでに媒介されている——ここから、そのようにいつもすでに(誤)読・解釈されて送り出されるテキストについてのカテゴリーやコー

ドを通してテキストを歴史的に把握する試みとしてのメタコメンタリーという方法を実践してみるという可能性が開かれることにもなる。そして、書かれることになるテキストが、その歴史的サブテキストを、読むことの対象として書き換えることで、始めて、歴史あるいは(単なる外的現実とはみなすことのできない)現実存在への志向性が、単純な反映論や還元主義とはまったく違った手続きにおいて、保持されるのだ。

ド・マンの批評理論と命名されたものは、たとえば、ルソー論としてジャン・スタロバンスキーによって提示された読むことを、差異をとまない反復することによってすなわち強力なやり方で書くことあるいは書き換えることによって、自身の読むことを遂行したものであったのではないか。ルソーを読むこと、たとえば、『新エロイズ』というテキストを解釈する行為は、マルセル・レーモンが言及したような伝統、(啓蒙主義期あるいはその終わり・別の歴史的契機への移行期に属する)ルソーに始まりロマン主義・象徴主義・実存主義へと展開する系譜学的ラインを根底的で批判的な吟味とともにたどり直すことにより、モダニティという一七世紀の出来事によって開始されたその歴史的過程とりわけロマン主義に関する系譜学的歴史そのものをラディカルに再考することにほかならなかった。直接性(透明性)と媒介性(障害)の二極の緊張関係によって『新エロイズ』を読もうとしたスタロバンスキーは、レーモンを弁証法化しようと試みてはみたが、より正確には、擬似弁証法化したにすぎないのだが、結局は、十分に弁証法的な思考を提示しえなかった、とされる。なるほど、直接性と媒介性の緊張あるいは二項対立は、両者の対立関係を乗り越える自然の経験、そして、(国家のような集合的・社会的次元への移行もまた措定・約束されているはずの)ある特別な個人的意識の経験すなわち情念のひとつである愛の行為によって自らの疎外を克服する経験を、思考・想像することを可能にはする。しかしながら、恋愛・倫理的レヴェルから政治的レヴェルへの移行の契機において、ジュリの信仰とヴォルマールの無神論との間の最終的な対立が露わになり、テキストは、世俗の幸福という「穏当な」エンディングではなく、宗教的な秩序に属するような別の結論を代案として出して終わる。

スタロバンスキーにしたがいこのように解釈してすまずのであれば、テキストの主題構造の結末に刻印された政治的言語から宗教的言語への移行は、政治的世界の解決不能な諸矛盾に直面しての回避・逃避の行為のようにはかみえない、ということになる。ド・マンからみるならば、「愛と政治の弁証法」は宗教的な経験に取って代わられるが、そうした経験は、もはや、

いかなる意味でも「弁証法的ではなく」、それ以前の全経験を単純に抹消していることに終わる、というのも、物質とは根本的に区別される精神にとつてのあらゆる障害を排しすべての媒介項を消失させる死だけが、神の顕現・自然宗教を賛美しているようにみえるジュリに神との無媒介的な遭遇を約束しているのだから。

ここで批判的になつてゐる研究あるいは批評が、理論としての洗練や精緻化を看板にしながら、実際の実践としては、物象化されその意味作用が固定化された主題・イメージあるいはトポスといったものを時代を追つてたどつてみたり陳列したりしてみせるといつたような文学解釈、または、さまざまな「〇〇の系譜」をこれまで名乗つてなされてきた数々の研究であつた、この点はいまさら確認するまでもないだろう。いわゆる近代的自我の問題を論じ、その歴史的軌跡をたどるにあたり、たとえば、ロマン主義以降の文学における「自」と「他」との結合というよりは融合を、(宮廷風恋愛の伝統のブルジョア・ヴァージョンとみなすこともできそうな)「愛死」の系譜(ドニ・ド・ルージュモン『愛について——エロスとアガペ』)によつて、より正確には、サルトル的な実存主義と性的欲望論(ノーマン・O・ブラウン『エロスとタナトス』)をさらに軽やかかつエレガントに風味付けされたエクスタシーの系譜によつて、一七世紀の形而上派詩人の場合にみられたとされる「対極の和解」と対比的に、論じる研究、そして、そうした「画期的な」研究に端を発するさまざまな研究パターンの少なからざる例を、各自それぞれに、思い浮かべてみればよい。そうした例に提示されているのは、T・S・エリオットがある批評エッセイで論じてある時期あまりにも有名かつ影響力のあつた「感性の分裂」という問題を、歴史や政治・経済・社会の問題からは自律したものであるとして切り離し、基本的なトーンとしては、ハイ・カルチャーとしての文学の問題または英国のナショナルな境界を越境した新種の思想史・エピステーメ論のそれとして脱政治化したものだったのかもしれない。と同時に、そうした研究や個々のテクストの解釈において暗黙の裡に想定され基盤となつてゐる、系譜学的に概念化された図式、すなわち、「発生論的パターン」と呼ばれるものこそが、根本的に再考されるべき文学史あるいはそれが孕む歴史のとらえ方にほかならず——ニーチェ『悲劇の誕生』解釈に端的にみられるド・マンの一連のテクストをみよ——、そうしたやり方とは異なるかたちでモダニティに規定された文学の歴史を含む歴史自体を捉えることをド・マンの理論・実践はおこなつてゐる、とみなすべきだ。「ニュー・クリティシズム以降」ということでは、ノースロップ・フライ『批評の解剖』とともにフランク・カーモード『ロ

マン派のイメージ』を、とりわけ、ド・マンの博士論文の重要な部分をなすイェイツ解釈が徹底的に吟味をおこなった後者のロマン主義研究に言及すべきであるが、ここでは、一九六〇年代終わりからの日本の「英文学」の歴史的状况や受容の軌跡を考慮して、もうひとつ別の批評テキスト、スーザン・ソントグ『反解釈』高橋康成・出淵博・由良君美・海老根宏・河村錠一郎・喜志哲雄訳 東京・竹内書店新社、一九七一を取り上げてみたい。ニューヨーク知識人第二世代に属するソントグの日本における過去の翻訳・紹介あるいは受容についてここで詳しく論じる余裕はないが、作品あるいはテキストについて、それぞれの立場や観点にそって特権化された内容や主題を「還元主義的に」解釈するマルクス主義とフロイト主義それぞれに対して、形式あるいはラディカルなスタイルの意志を分析する「反解釈」という新たな解釈を掲げたのがソントグであり、一九六六年論文集として彼女が出版したこの批評テキストにおいては、旧来の解釈学に代わって、「芸術の官能美学・エロティクス」(ソントグ 25)の必要が主張されたのであった。「マルクスにとっては、革命や戦争などの社会的事件が、フロイトにとっては、個人的生活上の事件(たとえば神経症の兆候や言いまわしがい)および本文(たとえば夢とか芸術作品とか)が、すべて解釈を発動させる機会として扱われる。……理解するとはすなわち解釈することである。そして解釈するとは現象を表現しなおすと、いや、その現象に見合う別の相関物を見つけることである」(ソントグ 17)。

ソントグ自身が主張しているように、解釈そのものは人間の意識の歴史的展開の中で評価されなければならないものであり、ある文化的文脈においては自由をもたらず行為となるのが解釈だとされるのであるが、「別の文化的文脈」においてはつまり文化冷戦の真只中にある米国の文壇と研究・教育制度を横断する批評空間においては、マルクス主義ならびにフロイト主義の解釈両方ともが、「反動的で、出しゃばりで、臆病で、抑圧的なものにはかならない」(ソントグ 17)と一刀両断に価値評価された。ニュー・クリティシズムについて、あるいは、その日本における受容の一端については、少なくとも「その盛期においては」、「マルクス主義や歴史主義との鋭い対決意識に支えられつつ、作品の精密な分析によって確かに貴重な成果をあげた」という評価もあったことが、訳者解説を読み返してみればわかる(ソントグ 35)。

きわめて簡略ではあるが、たとえば以上述べてきたように、ド・マンの批評理論のサブテキストを、われわれは(誤)読し歴史的(再)構築を實踐してみることができる。ド・マンのさまざまなテキストならびにそれとならぬかたちで関係性を

取り結ぶものを、本特集は、解釈することを遂行しているが、この「理論的」遂行・行為は、二一世紀のいまここでそれを試みようとするとき、実はそれに先立ってド・マンを書くことでもあった。そして、各々の論考のやり方はけして一様ではないし、狙いとするところもそれぞれ異なるとはいえ、本特集「ポール・ド・マンを読むこと／書くこと」は、このような問題意識を共有している。